

東大世界史



1章 前近代総合 I

添削課題

解答例

イスラーム世界はイベリア半島から北西インドまでに勢力を拡大し、ササン朝やビザンツ帝国の征服を通じて古代ギリシアやインドの文化を接収した。ギリシア文化からは哲学・医学・天文学などが流入し、アッバース朝がバグダードに設立した知恵の館ではギリシア語文献がアラビア語に翻訳された。インド文化からは数字やゼロの概念が導入された。これらは“外来の学問”として発達し、医学ではイブン＝シーナーが『医学典範』を著し、哲学ではイブン＝ルシュドがアリストテレスの著作の注釈を行い、数学ではフワーリズミーが代数学を発展させた。また、タラス河畔の戦いの際に中国から製紙法が伝来し、学問の記録や普及に役立った。イスラーム文化は十字軍や国土回復運動を通じてヨーロッパに伝わり、“12世紀ルネサンス”と呼ばれる文化興隆をもたらした。シチリア島のパレルモやイベリア半島のトレドなどでアラビア語文献がラテン語に翻訳され、アリストテレス哲学を取り入れたスコラ哲学が隆盛した。大学では『医学典範』を教材に医学研究が行われた。13世紀になると、イスラーム科学の影響で自然科学の基礎が確立された。一方、イスラーム科学は中国へも伝わり、授時暦の作成などに影響を与えた。(510字)

解説

《アラブ・イスラーム文化圏をめぐる動き》

7世紀のアラビア半島で生まれたイスラーム教は、ムスリムらの征服活動に伴って各地に信仰を広めていった。イスラーム勢力は異教徒に対するジハードを掲げて積極的な征服活動を展開し、正統カリフ時代(632～61)にはビザンツ帝国からシリア・エジプトなどを奪い、ササン朝を滅ぼしてイランを征服した。さらにウマイヤ朝時代(661～750)には、西方では西ゴート王国を滅ぼしてイベリア半島を征服し、東方では中央アジアから北西インドまでを支配下に収めた。ピレネー山脈を越えて今日のフランスに侵攻したウマイヤ朝軍は、宮宰カール＝マルテルの率いるフランク王国軍とのトゥール・ポワティエ間の戦い(732)に破れ、それ以上の侵攻を阻止されたが、イベリア半島から北アフリカ、ソグディアナをまたがり北西インドに至る広大な領域がイスラーム世界に組み込まれることとなった。こうした拡大の結果、イスラーム世界にはキリスト教徒やゾロアスター教徒など、数多くの非イスラーム教徒が居住することになり、これらの人々の持つ様々な文化がアラブ・イスラーム世界の文化に影響を与え、隣接するインドや中国といった異なる文化圏からも新しい文物が流入することになった。

ビザンツ帝国に継承されていた古代ギリシアの文化は、アラブ・イスラーム文化に大きな影響を及ぼした。9世紀には、アッバース朝(750～1258)の首都バグダードに知恵の館と呼ばれる学問研究機関が設立され、ギリシア語の文献が体系的にアラビア語に翻訳されていった。これらの翻訳により、イスラーム世界の学問は飛躍的に発達し、哲学の分野では、アリストテレスに代表されるギリシア哲学の研究がイスラーム哲学の本流となり、モロッコで興ったム

ワッヒド朝に仕えたイブン＝ルシュドがアリストテレスの著作の優れた注釈書を著すなど、大きな成果を残した。また、ヒポクラテスに始まる医学もイスラーム世界に伝えられ、中央アジアのサーマーン朝で活躍したイブン＝シーナーがイスラーム医学を集大成した。なお、イブン＝ルシュドとイブン＝シーナーは哲学・医学のどちらの分野にも秀でており、それぞれの分野で多くの優れた著作を残している。一方、東方のインドからは、数字・十進法・ゼロの概念などが伝えられた。ゼロを含む10種類の記号を用いる記数法が確立したことでイスラーム世界では代数学が発達し、アッバース朝時代の数学者フワーリズミーによってアラビア数学が確立することになった。

こうした学問は、『コーラン』の研究を基盤とする神学・法学・修辞学・歴史学などのアラブ人の“固有の学問”に対して“外来の学問”と呼ばれ、哲学・医学・数学以外にも地理学や天文学、錬金術などが含まれる。また、文学においても他地域からの影響は大きく、アラビア語文学の傑作とされる『千夜一夜物語（アラビアン＝ナイト）』は、ペルシア語の説話集をアラビア語に翻訳したものが原型となっており、のちにインドやギリシアなどを起源とする説話も加えられて、16世紀頃のカイロではほぼ今日の形に整えられた。

中国からは、中央アジアでアッバース朝軍と中国の唐軍が衝突したタラス河畔の戦い（751）で、捕虜となった唐兵の中に紙すき工が含まれていたことから、製紙法がイスラーム世界に伝えられた。イスラーム世界で紙が普及したことは、イスラーム学問の記録や伝播に大いに役立った。また、イスラーム勢力は海路や陸路によって中国と交易を行っており、13世紀にモンゴル帝国がユーラシア大陸の大半を支配下に置くと、商業だけでなく文化的な交流も活発になった。イスラーム世界で書物の挿絵として始まったミニアチュール（細密画）は、13世紀に成立したイル＝ハン国の下で中国絵画の影響を受け、一層の発展を見せた。

こうして、ギリシアやインド・中国などの文化を取り込んで高度に発達したイスラーム世界の文化は、逆に他地域に影響を及ぼすことも多く見られた。とりわけ中世ヨーロッパは、8世紀に始まる国土回復運動や11世紀末からの十字軍によってイスラーム世界と敵対する一方で、積極的にイスラーム文化を吸収していった。シチリア島のパレルモやイベリア半島のトレドなどではアラビア語文献のラテン語訳が進められ、医学や哲学に関するアラビア語の著作が多数ヨーロッパに紹介された。なかでも、イブン＝シーナーはアヴィケンナというラテン語名で知られ、彼の著した『医学典範』は、医学で有名な南イタリアのサレルノ大学などで教材とされるなど、16世紀に至るまでヨーロッパ医学の教科書として重用された。また、イブン＝ルシュドはアヴェロエスの名で紹介され、彼のアリストテレス研究の影響を受けて、ヨーロッパではギリシア哲学とカトリックの神学が融合したスコラ哲学が形成され、13世紀にはスコラ学者のトマス＝アクィナスによって大成された。このように、12世紀のヨーロッパでは、イスラーム世界からもたらされた学問に刺激を受けて文化が大いに発展したことから、こうした文化の隆盛を“12世紀ルネサンス”と呼ぶ。13世紀になると、スコラ学者ロジャー＝ベーコンが、イスラーム科学を手掛かりに、経験を重視する実験科学の手法を考察し、自然科学の発展に寄与した。

こうした学問的な発展のみならず、ヨーロッパではイスラーム世界からもたらされた文物によって産業や生活様式が様々に変容した。南イタリアに進出したノルマン人がシチリア島のイスラーム教徒を制圧して12世紀に建国した両シチリア王国では、一時ノルマン・ビザンツの

ヨーロッパ文化とイスラーム文化が平和的に共存しており、国王ルッジェーロ2世（位1130～54）に招かれたイスラーム地理学者のイドリーシーは、「ルッジェーロの書」と題する地理書や世界地図を作製した。また、12世紀頃には、イスラーム世界を介して中世ヨーロッパに製紙法が伝えられ、従来の羊皮紙などに代わる書写材料として急速に普及した。このほか、イスラーム世界を介して中国からヨーロッパに伝えられた羅針盤や火薬、印刷技術などの発明は、近代ヨーロッパの幕開けの重要な誘因となった。

ほかにも、中国では、イスラームの天文学が伝わり、元代に郭守敬によってイスラーム世界の暦法の影響を受けた授時暦が作成された。また、ムスリム商人の海上交易の拠点となった東アフリカでは、海岸地帯を中心に現地の言語にアラビア語の影響が加わったスワヒリ語が成立し、東アフリカ一帯の商業用語として用いられるようになった。

■自習問題

解答例

政治面では、ドミナトゥスによる集権的支配の定着が、東ローマ帝国に継承され安定した統治を東ヨーロッパにもたらした。一方で、これを支えるため都市に重税を課し、農村においてコロナトゥスを定着させたことは、帝権の及ばなかった西ヨーロッパを自立的な農業社会とし、ゲルマン民族の侵入もあり強力な政治勢力の誕生を阻害した。宗教面では、ミラノ勅令によるキリスト教の公認とニケーア公会議での教義統一、その後の国教化は、ヨーロッパ全体を一元的な宗教世界にした。東ヨーロッパでは皇帝教皇主義による聖俗の一体化が実現したが、政治的統一に欠けた西ヨーロッパでは、正統と異端の対立からローマ教会の権威を高めることになった。(299字)

解説

《4世紀のローマ帝国》

東京大学の入試では、ヨーロッパ史に関して、中世から近世、近世から近代へのつながりが出題されることは多いが、古代から中世へのつながりが出題されることは少なかった。1978年の第3問に類似したテーマが見られるが、近年では皆無といってもよい状況であった。しかし、2011年度の第1問では7世紀～13世紀のイスラーム文化圏をめぐる動向が出題の中心となった。論述の字数においても2009～2010年度には600字という制限字数で出題されている。全問を通して古代から現代まで出題されやすくなった2009年以降の傾向とあわせて考えると、このような古代と中世の関係は今後出題される可能性が高いといえるだろう。

まず設問の要求であるが、書くべき対象は『4世紀のローマ帝国に起きた事象』となるが、ただ漠然とこの時代の出来事について書きしるせば良いわけではない。条件として示されているが、4世紀に起こった出来事の中から、『ヨーロッパの中世世界の形成にとって重要な意義を有した』もののみを選び出して記述しなければならない。さらに、選び出した事象が『中世世界の形成』にしっかり結びついていることにも言及するべきであろう。東京大学の大論述においても、このような条件付けが頻繁に行われており、題意を満たすことのできる事象をしっかりと選択しなければ、正解に近付けないことになっている。このような特色が、ただ単に年表を暗記しているだけでは、高得点につながらない所以であると考えてよいだろう。

まずは、該当する事象を選択するためには、『中世世界』とはどのようなものであるかを確認しなければならない。ここで注意が必要なのは、設問文では『ヨーロッパ中世世界』となっており、地域は特定されていない、ということである。ヨーロッパ史を学習する場合、変化の度合いの激しかった西ヨーロッパ世界が中心になることは避けられないが、だからといって東ヨーロッパ世界を無視してよいことにはならない。この設問のように『ヨーロッパ』という指定がある場合、学習した内容の多い「西ヨーロッパ」のみを解答の対象とすることのないよう十分な注意を払ってほしい。このことを踏まえて、東西ヨーロッパの中世世界の概観を考えてみよう。

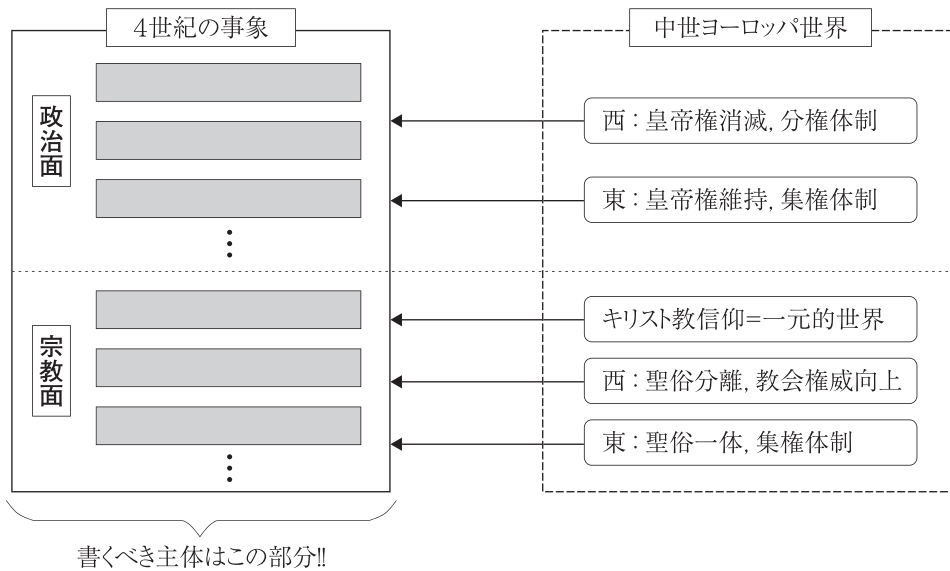
西ヨーロッパは、ローマ帝国末期の都市の衰退と自立的大所領の登場が分権傾向を促し、ゲルマン民族大移動に世俗の権力が対抗できなかったこともあり、政治的統一に欠けた分裂状態となった。このことがのちに封建社会の成立につながるのである。ただし、封建社会の成立に直接的な影響を及ぼしたのは第2次民族大移動であることから、ここでは、西ローマ帝国の滅亡による皇帝権の消滅、ゲルマン国家の分立による分権化を想定するべきであろう。一方で、キリスト教の公認、国教化によって宗教的にはキリスト教精神を基盤とする、一元的な宗教世界になっていったことは、不安定な政治勢力に代わって、西ヨーロッパにおけるキリスト教信仰の中心であったローマ教会の持つ権威を、相対的ではあるが高めていった。さらに、これを維持するために行われた異端や異教徒との抗争や布教活動を通じて、一層、ローマ教会の地位は向上していった。

東ヨーロッパでは、ローマ帝国以来の皇帝専制、中央集権統治が東ローマ帝国（ビザンツ帝国）に継承され、皇帝権の維持された状態が続いた。スラブ民族がビザンツ帝国の影響を強く受けたことで、東ヨーロッパ世界の中世は、概ね、集権国家による支配が続いていた。宗教面においては、西ヨーロッパ同様、キリスト教精神による一元的な宗教世界であったが、ローマ帝国以来の皇帝教皇主義が広がり、皇帝権を上位とする聖俗の一体化が進んだ。このことは、ビザンツ帝国の保護を失ったローマ教会との対立につながり、キリスト教世界の東西分裂へと発展していった。

以上のような点が、ヨーロッパ中世世界の特色と考えてよいであろう。あとは、『4世紀のローマ帝国に起きた事象』の何が、このような中世世界の形成に直接結び付くのかを考えればよいことになる。

このような設定の場合、最初を書くべき対象である『4世紀のローマ帝国に起きた事象』を挙げてしまうと、ついその事象の説明の方に目が行ってしまい、中世世界の形成との関係を見失いがちである。題意にあった“事象”を選ばなければならない以上、まずは、条件の方を確定させた方がわかりやすいはずである。

次ページに簡単な模式図を示しておく、これを参考に、どのような事象を選ぶべきなのかをしっかり考えてほしい。



解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

2章 前近代総合Ⅱ

添削課題

解答例

前3世紀、ポエニ戦争でカルタゴの植民市が征服され、フェニキア人に代わりラテン人が進出した。ローマの属州時代に円形劇場・水道橋などが建てられ、キリスト教も流入し始めた。5世紀、ゲルマン人の西ゴート王国が成立したことで一時アリウス派が流行したが、8世紀よりアラブ人による征服でイスラーム化が進み、後ウマイヤ朝の都コルドバなどにモスクやマドラサが建てられた。一方のキリスト教側は、カール大帝が北東部に辺境伯を設置したほか、北西部にサンティアゴ教会を建て、11世紀頃より巡礼熱の高まりを背景に西欧世界との交流を深めた。この頃、国土回復運動も本格化し、カスティリヤ王国が征服したトレドなどで、アラビア語文献のラテン語訳が進展した。北アフリカを拠点とするベルベル人のムラービト朝・ムワッヒド朝が国土回復運動に対抗したものの徐々に圧倒され、15世紀後半、カスティリヤとアラゴンが合併しスペイン王国が成立すると、都グラナダにアルハンブラ宮殿を残したナスル朝を征服し、国土回復運動を完了させた。(436字)

解説

《イベリア半島の歴史》

問われているのは「紀元前3世紀から紀元15世紀末にいたるイベリア半島の歴史」だが、単に政治史の展開を述べるだけでは不十分である。なぜなら、問題文の下から3行目にある「このような広い視野のもとでながめるとき」という条件も満たす必要があるからだ。一応、政治史の展開を簡潔に示しておく、フェニキア人→ローマ帝国→西ゴート王国→ウマイヤ朝・後ウマイヤ朝、一方でキリスト教勢力は北部へ→カスティリヤ王国などの国土回復運動本格化、一方でムラービト朝・ムワッヒド朝による対抗→スペイン王国によりナスル朝グラナダ王国滅亡→国土回復運動完了、ということになる。この流れを論述の柱とした上で、どういった情報・論点を加えていくか（または、削っていくか）、その取捨選択によって実力の差が出る。

取捨選択の基準は、「このような広い視野のもとでながめる」という問題文の記述に基づく。すなわち、

- ①「古来さまざまな民族が訪れた」ということ
- ②「多様な文化の足跡を残した」ということ
- ③「ヨーロッパやアフリカの諸勢力」から影響を受けたということ

である。解答中でフェニキア人、ラテン人、ゲルマン人、アラブ人、ベルベル人を指摘したのは①を意識してのことである。

話はあるが、皆さんはどのくらいスペインの世界遺産を知っているだろうか。なんと(?)文化遺産だけで全部で40近くもある。いくつか紹介すると、例えば、タラゴナには、ローマ帝国時代の円形競技場などが残されている。セゴビアのローマ遺跡、水道橋も有名だ。トレドは西ゴート王国の中心都市だが、キリスト教徒に征服されたのちも、キリスト教徒・ユダヤ教

徒・イスラーム教徒による翻訳活動の舞台になっている。トレドがキリスト教徒の支配下に入ったのは1085年だが、その国土回復運動が本格化する背景の一つが、イベリア半島北西部のサンチャゴ＝デ＝コンポステラへの巡礼である。ピレネー山脈を越えて多くの人々がサンチャゴ＝デ＝コンポステラをめざしたことで、スペイン北部とフランスの間のネットワークが発展し、人口増加・商業の発展などが引き起こされた。一方、イベリア半島におけるイスラーム建築の代表といえ、グラナダのアルハンブラ宮殿であろう。北アフリカ経由で侵入してきたイスラーム勢力は、イベリア半島にイスラーム世界の諸文化を持ち込んできた。

もちろん、これらの話は②③と関連するものである。「文化の足跡」として、ローマ風の建造物、サンチャゴ＝デ＝コンポステラ、アルハンブラ宮殿などは、できれば解答に反映させたい。トレドなどで行われた翻訳活動も、可視的な「足跡」ではないが、同様に重要であろう。サンチャゴ＝デ＝コンポステラへの巡礼は、ピレネー以東との物的・人的な交流を促進させたし、アフリカのベルベル人王朝であるムラービト朝・ムワッヒド朝の統治下では、サハラ砂漠の南にまで広がるムスリムの商業網と結びつきを深めた。この辺りとは字数との戦いだが、毎回真剣に答案作成に取り組んできた皆さんなら、論理性を損なわず、かつ情報を充実させる文章技術も磨かれてきたはずだ。なお、文化史の情報を多少削って、イタリア商人（とくにジェノヴァ）との交流から航海技術を発展させたこと、ポルトガルへの言及、国土回復運動と「大航海時代（大交易時代）」との結びつきなどについて言及するのも一策である。様々な別解があり得るだろう。

あとは若干の補足だが、圧倒的多数の人が、8世紀におけるイスラーム勢力（ウマイヤ朝）の征服について言及しているだろう。それなら、それ以前にキリスト教が広まっていたことについてもほしい。また、ローマ風の建造物に言及したのなら、イスラーム世界に特徴的な街並み（モスクとか）についても一言はあってもよい。答案の草案を練る際、こうしたことにも気を配ってほしい。また、西ゴート王国でアリウス派を指摘する場合、答案で指摘する必要は必ずしもないが、6世紀末に西ゴート王国はカトリック（アタナシウス派）に改宗しているため、アリウス派は急速に衰えていったことも知っておこう。なお、アリウス派の時代と比べて、カトリックのもとではイベリア半島のユダヤ教徒に対する抑圧が厳しくなったため、8世紀のイスラーム勢力による征服は、ユダヤ教徒にとって歓迎できることであった。（これは、1987年度東大の中論述にも通じる視点である。「イスラーム教が広まった初期の過程で、各地のキリスト教徒・ユダヤ教徒・ゾロアスター教徒などがイスラーム教徒の支配を進んで受け入れるということがしばしば見られた。その理由と思われるところを120字以内で述べよ。」）

最後に指定語句について。「カール大帝」の使い方が難しかったはずだ。解答では辺境伯領について触れたが、あまり教科書で扱われている話ではない。ただ、文化史の学習をしっかり行っていれば、『ローランの歌』の概要は知っているはずだし、カール大帝の治世下でイベリア半島への遠征が行われたことを想起するのは不可能ではない。「カールの戴冠」と結びつけて述べる手もないわけではないが、その場合、イベリア半島の歴史という主題から外れないような文章展開に強く留意しなくてはならない。なお参考として、教科書の範囲を完全に逸脱してしまえば、イベリア半島北西部のアストゥリアス王国（のちのレオン王国、やがてサルデーニャと合併）が、アルフォンソ2世の治世下でフランク王国のカール大帝と外交関係を結んでいる。当時の都オビエドには、フランク王国のアーヘンを模した宮廷が建てられるなど、西

ヨーロッパ世界との結びつきが進んだ。彼の治世下でサンティアゴ教会が建てられ、のちのサンティアゴ巡礼は巡礼路の発展、ピレネー以東との交流を促進させたという説明も可能である。(東大入試は、高校教科書の範囲内で十分に高度な解答が作成することが可能である。これは、あくまでも一参考として示した。)

■自習問題

解答例

ビザンツ帝国を滅ぼして首都をイスタンブルにかまえたオスマン帝国は、異教徒にはミット単位での自治を認める宗教的寛容性を持っていたため、ヨーロッパに住むユダヤ人の中にはオスマン帝国へ移住する者も多かった。スレイマン1世の治世にはハンガリーを支配し、第1次ウィーン包囲で神聖ローマ帝国を脅かし、プレヴェザの海戦ではスペインを破り地中海の制海権を握った。レパントの海戦には敗れたものの優位は揺るがなかった。当時の西ヨーロッパでは官僚制と常備軍に基づく絶対主義体制による主権国家が成立していたが、オスマン帝国によるウィーン包囲は、ルターの宗教改革運動を進展させたことにより主権国家体制の形成に影響を与えた。(300字)

解説

《15世紀後半～17世紀のオスマン帝国側から見たヨーロッパとの関係》

この2章分の学習で地中海についてしっかりと学習してきた人にとっては、この問題も「また、オスマン帝国か」とげんなりしているかもしれない。なぜ地中海が論述のテーマに選ばれやすいか。国単位で世界史を学習してきたときに（国単位で世界史を学習するのは前近代においてはまず不可能だし、歴史の見方も全くだめなものになってしまうのだが）、どうしても「地域」という視点が欠けてしまうことになる。受験世界史においては、この「地域」という視点こそが、今まで学習したことを総合して理解するためのほぼゴールに近い標識だと思ってほしい。

しかし、この問題は今まで学習してきたものとは少し異なるいやらしさがある。時期的に15世紀後半から17世紀というのは別になんでもない。ビザンツ帝国の滅亡からカルロヴィッツ条約までというのは瞬時にわかり得ることだ。問題なのは「オスマン帝国とヨーロッパとの関係をオスマン帝国の側から」というところだ。何かことさら強調することなのだろうか。リード文には「ヨーロッパは…オスマン帝国との…接触により、歴史上大きな変容を遂げるようになった」とある。確かにルネサンスの促進に影響を与えたこと、宗教改革運動に対する弾圧が徹底できなかったことなどの話を思い出すであろうが、これらはオスマン帝国がヨーロッパに進出したから起こり得たことである。とすると「オスマン帝国の側から」というのは何を意味しているのかはわかったであろう。「ヨーロッパの側から」と言い換えてみると、この問題は成り立たなくなってしまう。なぜかという、リード文冒頭の「ヨーロッパは…大きな変容を遂げた」という文章と矛盾してしまうからである。結局、この問題も素直に「オスマン帝国がヨーロッパに進出してきたことでヨーロッパにどのような影響を与えたか」ということが問われていると解釈すべきである。そうでないと教科書を越えた細かな事象や複雑な事象が出題されたとして、だれも解けないではないか。あえて注意を促しておくならば、問われているのは「オスマン帝国とヨーロッパの関係」であって「イスラーム世界とヨーロッパの関係」ではない。ゆえにナスル朝とのこと、つまり国土回復運動のことは書いてはいけない、ということであろう。

指定語句として課されている「官僚制」については、確かに官僚制はオスマン帝国でもとられていたが、西欧世界の官僚制はオスマン帝国を模倣したものとは教科書にはっきりとは書か

れていない。ゆえに今回の解答例では主権国家を説明するためのものとして表現した。カルロヴィッツ条約まで書かなかったのは、あくまでオスマン帝国の進出によるヨーロッパ世界の変容という題意からはそれていくと考えたからである。指定語句「宗教的寛容」はミットで使うことは想像できたかもしれないが、ヨーロッパの変容とどのようにつなげればよいのか、非常に困ったところである。ここではユダヤ人のことを書いておいたが、賛否両論あると思う。他の使い方をゆっくりと考えてみてほしい。「イスタンブル」という指定語句も困った。ヨーロッパの変容とは全くつながりが見られない。「宗教的寛容」もこれと同じであるが、解答例のように、オスマン帝国がバルカンに進出しましたよ、ということで使えばよいのであって、変に考える必要はないのかもしれない。

地中海というテーマで勉強していく中で、東アジア世界を除くかなりの情報をここから見出すことができる。しっかりと復習しておきたい。

別解

オスマン帝国は1453年にビザンツ帝国を滅ぼし、コンスタンティノープルをイスタンブルと改称し都とした。オスマン帝国の東地中海制圧と東方貿易への重税は西欧をアジアへの新航路開拓へ向かわせた。16世紀前半のスレイマン1世によるウィーン包囲は、神聖ローマ皇帝カール5世に一時ルター派を容認させ、宗教改革運動を進展させた。プレヴェザの海戦で地中海制海権を獲得し、レパントの海戦での敗北後も17世紀末期までオスマン帝国のヨーロッパへの優位は続いた。帝国内ではキリスト教徒や西欧を追われたユダヤ教徒などのミットを許し宗教的寛容を示し、大宰相以下の官僚制と常備軍による国家体制は西欧の絶対主義体制の形成に影響を与えた。(299字)

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

3章 前近代地域史

添削課題

解答例

元の侵入の混乱からジャワではマジャパヒト王国が成立し、スマトラ島にも勢力を広げ、マレー半島南部まで支配した。同国は現在のインドネシアのほぼ全域を支配した。モンゴルの侵攻がインドシナ半島にも影響を及ぼし、チャオプラヤ川流域にタイ族が南下してクメール人を圧迫した。タイ族の建国したスコータイ朝やアユタヤ朝は現在のタイの領域を支配し、上座部仏教も定着し、現在のタイ文字の原型も作られた。ヴェトナムではモンゴルの侵攻が民族的自覚を高め、陳朝で字喃が作られた。黎朝はチャンパーを攻めて、現在のヴェトナム中南部まで支配を広げた。15世紀から東南アジアにおいて「商業の時代」が始まることで、マラッカ王国の発展も始まった。同国は15世紀中期以降にはインド洋のムスリム商人との結びつきを強め、マラッカを中心とするムスリム商人の活動とともに東南アジアの島嶼部には16世紀以降にイスラーム教が普及し、現在に至る。(392字)

解説

《東南アジア》

「今日の政治と文化の原型が確立された」ことをうまく示せるかどうか、大切な部分である。

元の侵入で混乱するジャワでは、シンガサリ朝が内紛もあり崩壊する中、ジャワ最後のヒンドゥー教国であるマジャパヒト王国が13世紀末に建国される。この国家は「現在のインドネシアのほぼ全域を支配した」ことを示すこと。15世紀後半からはマジャパヒト王国からマラッカ王国（後述）に交易による繁栄は移っていく。

モンゴルの活動を機に大発展したのがタイ系諸族である。13世紀に雲南地方から南下したタイ系諸国は、現在のタイ・ビルマ（ミャンマー）・ラオスの地に建国してゆく。元朝の侵攻でビルマ（現在のミャンマー）のパガン朝は倒れ、ヴェトナム地域の陳朝やチャンパー、カンボジア地域のアンコール朝などは混乱を強める。13世紀以前、チャオプラヤ（メナム）川にはクメール人の勢力が存在し、アンコール王朝の真臘はその代表格である。タイ系諸族は13世紀後半から14世紀にかけて、チャオプラヤ川中流域にスコータイ朝を、メコン川中～上流（現在のラオスの地）にランサン王国を建国した。スコータイ朝では上座部仏教が立国の精神・統治の原則とされた。従来、インドシナ半島では大乘仏教やヒンドゥー教が王権と結びついてきたが、この時代から上座部仏教へと変化してゆく。スコータイ朝に続くアユタヤ朝でも上座部仏教が篤く保護された。スコータイ朝では現在のタイ文字の原型も作られた。アユタヤ朝については港市国家として繁栄した点も確認しておこう。港市国家については、用語集などでその意味を参照しておくこと。

アユタヤ朝を内陸型の国家とする考え方に対して、近年では港市国家としての性格に重きを置く考え方が広まっている。アユタヤを内陸国タイの首都としてではなく、港市国家と見なす

ようになってきたということである。アユタヤはタイ東北部の物資をタイ（シャム）湾に流すパーサク川と、北部からの物資が運ばれるチャオプラヤ川の合流地点に位置し、タイ湾とベンガル湾を連絡する都市であった。

ヴェトナムの陳（チャン）朝では13世紀末の3度にわたる元軍の侵攻を退け、その抵抗を通じて民族意識の高揚が見られた。民族文字の字喃が作られ、初の歴史書『大越史記』も編まれる。黎（レ）朝は中南部に勢力を拡大しチャンパーの首都を1471年に攻略し、15世紀末にはほぼ現在のヴェトナムに当たる地域を領土とした。

現在の東南アジア島嶼部にはイスラーム教が広まっているが、それもこの時期に始まりがある。イスラーム教の普及過程で重要な意味を持つのがマラッカ王国である。かつてはマラッカ王国を「東南アジア初のイスラーム国」と表現することがあったが、最近は「東南アジア最初の本格的なイスラーム国」と（山川の『用語集』でも）表現されている。文字通りに東南アジア初のイスラーム国ではないが、この国が東南アジアへのイスラーム布教センターであり、「この国から東南アジアへイスラーム教が広まった」と書くことは許されるであろう。

「13世紀から16世紀にかけての東南アジアの歴史」であり、「今日の政治と文化の原型」に関係する事項であれば、解答例に示されていない事項でも、もちろん加点対象である。

■自習問題 1

解答例

マラッカ王国が建てられ、中国との朝貢貿易で繁栄した。国王がイスラーム教に改宗して、ムスリム商人とのつながりも持った。1511年にポルトガルに滅ぼされ、マラッカはポルトガル領となった。(89字)

解説

《マラッカの歴史》

ある地域をある程度の時間の長さで区切って、政治（支配）や文化状況の変遷などを眺めさせていく。このタイプの出題は多くの大学で見られる。字数も短いものあり、長いものあり、様々である。この際、国家の歴史が問われることはきわめてまれであって、なぜなら、それは国史であって世界史にならないからである。一つ一つの国の歴史の集合体が世界史では決していないのだ。もともと私たちが知っている「国」というのは主権国家であって、前近代世界においては国の概念が私たちのものと大きく異なっているのだから出題されようもない。そのような場合は「王朝の興亡」というかたちで問われるしかないのだ。

1997年度東大入試はマラッカの歴史についての出題である。マラッカ王国について詳細な歴史を覚えている受験生はそれほど多くはないと思われる。14世紀末にマラッカ王国が建てられ、16世紀前半に滅びることくらいであろう。つまり、それらの知っていることを正確に書くことが、得点へのポイントであろう。

リード文の中にイスラームの語がないことから、そこを書けるかどうかポイントになる。しかし、それはマラッカ王国の中で最も大事な事項だが、注意すべき点ではない。教科書丸写しで南シナ海やインド洋の商業活動で繁栄した、ということは、問題に書かれているので再度答案で述べる必要はないと判断してよいだろう。

■自習問題2

解答例

1624年にオランダが中国貿易の中継地点として征服したが、1661年には復明運動のために大陸から逃れてきた鄭成功によって駆逐された。最終的に鄭氏を討伐した清の支配下に入った。

(83字)

解説

《台湾の歴史》

1999年東大入試では台湾のことが問われている。中国と目と鼻の先でありながら、中国王朝の支配下に置かれた歴史がないのは珍しい。隋の煬帝のときに遠征を受けたが支配には至らなかった。今でも台湾には原住民（高砂族が有名）がいる。

支配勢力によってその地域のイメージは大きく異なってくる。こういった問題も地図をしっかりと見ながら学習していくしかない。世界史学習はいつまでたっても地図から離れるわけにはいかないのだ。

細部の表現は異なるであろうが、方向性は概ね解答例の通りになるであろう簡明な問題である。別に年号は必ずしも入れる必要はない。順番を明らかにしただけである。地味なところだが、オランダがなぜこの島に注目したかということについては、教科書を熟読しておかないとすぐに表現できない。ゼーランディア城といった用語で安易に字数を埋めようとする前に、このような点にも注意を向けたいものである。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。